

Close Up



家庭を守りながらも 教育と研究に没頭

大学で学んでいた頃は中学校の教員を希望していたのですが、大学の研究室に2年間副手として残ったことで大学教員に目標が変わり、大学院の修士・博士課程に進みました。その後、金城学院に招かれ今年で勤続10年になります。着任当初、主人は鎌倉勤務と離れ離れの生活でしたが、教育や研究に没頭した日々を過ごしました。偶然娘の出産の日に主人の名古屋転勤が決まり、今は親子3人で暮らしています。子育て中の今も、同僚の先生方に助けていただける

金城学院大学生活環境学部
環境デザイン学科

片瀬 真由美 助教授

大妻女子大学家政学研究所
被服環境学専攻満期単位取得退学
学術博士

研究課題 / ユニバーサルファッション論
靴着用に関する人間工学的研究
日本とドイツにおける靴文化研究

身近な靴が研究テーマ 子どもたちの未来のために 正しい知識を名古屋から発信します。

片瀬先生が足と靴に興味を持つのは、人間が歩き始めたことにロマンを感じるからで二足歩行は人間のルーツ、人が人たる所以である足の研究を極めてみたいのだそうです。先生は一児の母でもあり、家庭と仕事の両立と忙しい毎日をご過ごされていますが、この職業に就けたことに感謝しながら、教育と研究に打ち込んでいらっしゃいます。

という恵まれた環境に感謝しつつ、仕事を続けています。

私の専門は被服分野の中の既製服サイズと体型の研究です。例えばサイズが同じ人でも薄っぺらい体型、厚みや凹凸のある体型と体にはさまざまな形があります。しかし現在の既製服には残念ながら体型情報はほとんど反映されておらず、実際の人体の形と必ずしも適合していません。この不適合の問題を発展させ、現在は足と靴の適合性に関する研究に力を注いでいます。

幼少時から靴が大好き 第一歩はミュールの研究

私は幼稚園のころから靴が大好きで、デパートに行くとき靴売り場から離れなかったり、思春期になると、服より靴を買うことの方が圧倒的に多かったという靴好きです。その後、大学院

で足の研究の第一人者、近藤四郎先生の講義を受ける機会があり、靴の機能性の重要性について興味を抱きました。

今から4～5年前のことですが、厚底靴やミュールが大流行しました。足を痛めても、履きたいと思う若い女性の実態を見ることができず、問題点を明らかにしようと思ったのが靴の研究の始まりです。身近なテーマのせいか学生も積極的に調査に協力してくれましたし、講義も真剣に聞いてくれました。学生は、未来の母親予備軍です。自分自身の足の健康もさることながら、子どもの健康のためにも足と靴についての正しい知識を身に付けて欲しいと思います。

子ども靴の研究を ライフワークとしていきたい

日本ではいちいち足のサイズ

を測ってから靴を買う人はほとんどいませんよね。靴の国といわれるドイツでは、サイズを測ることはあたり前。特に子ども靴は機能重視で選びます。かたや日本では、キャラクターものやデザイン重視の子ども靴ばかりです。

今プロジェクトを組んで、日本とドイツの子ども靴の比較の研究を始めています。ドイツの靴と文化に日本が学ぶことがあるのではないかと考えたからです。靴は体を支え、人の生活を支える大切な道具です。小さい時に履いた靴が足の健康の一生を左右することもあります。子ども靴の研究は非常に奥が深くやりがいがあります。今後もライフワークとして取り組み、得られた結果を日本の行政や、お母さん達に伝えていきたいと考えています。

片瀬先生はこんな人

いつも笑顔で、とても熱心。尊敬している先生です。

初めての片瀬先生の講義は正直驚きました。袋いっぱい子ども靴を持ってきて、とても熱く子ども靴の置かれている現状

を語られたのです。その熱心さもすごいなと思ったのですが、とてもわかりやすかったのが印象的でした。常に笑顔で聞き上手な片瀬先生は、私たちがうまく自分の思いを表現できなくても、スーッと理解してくださるし、やりたいことを尊重して下さいます。家庭もしっかり守り、ひとつのことを貫いていく魅力的な姿は、同じ女性として尊敬しています。

片瀬先生と4年生の名倉咲江さん(左)と鈴木磨穂さん(右)

